Magnificent story

('A`)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ｍａｇｎｉｆｉｃｅｎｔ　ｓｔｏｒｙ

【Ｎコード】

Ｎ３１５６Ｗ

【作者名】

（ｰＡ、）

【あらすじ】

これは、帝国に立ち向かい、国を取り戻そうとした、とある少年の物語。

プロローグ

ーここは、『旧クラティア王国』。
つい最近までは、大陸で最も栄えた王国だった。

ー帝国と、戦争をするまでは。

旧クラティア王国と、『ザルジバ帝国』は、大陸の領土権を巡り、以前から敵対していた。
王国は一切、軍事的手段をとらなかった。

帝国からの攻撃を受けたために、王国側も応戦。戦争になった。
戦争は5年間も続き、旧クラティア王国の、第8代国王、サモン＝ペア＝クラティアは自決。
その後、王国側は、帝国への無条件降伏を宣言した。
現在旧王国は、帝国の、アーノルド＝フリンクによって治められている。
彼は、帝国の次期帝王候補にも名前が挙がっている。
彼は王国に赴き、国民の前で演説を行った。
「私は今日これより、この王国を治める者、アーノルド＝フリンクだ。国民諸君！帝王が憎いか！いや、憎くて当然だな。…私は！君達に何も望まない！今まで通りの生活を送ってくれて構わない。私に忠誠などしなくて構わない！この王国は、国民の物で有るべきなのだ！！」

ーこの演説で、アーノルド＝フリンクの人気は上がった。
ー一部の者を除いては。

これは、帝国に立ち向かい、国を取り戻そうとした、

一とある少年の物語である。

『Magnificent story』

俺は全部取り戻す

―俺の名前は、ノックス。親の顔なんて知らない。

俺の親は、帝国に挑んで、死んだ。そう聞いている。
２歳の頃から、俺は『ナムラズ＝マッシ』、通称ナムさんの家で暮らしている。
ナムさんは、人間族とは違う、半人半竜の、竜人族。
種族の違う俺を、自分の子供のように育ててくれた。
お陰で俺は１５歳になった。
金は、いつも街にいる帝国の兵士からスッている。
元々はクラティア王国の物だから、盗んでるんじゃない。取り戻してるんだ。

―いつか全部取り戻す。
金も、人も、国も。全部。
「―ノックス！」

―また面倒なのが来たな…

魔法は買うもの。

「ーノックス！」
息を切らしながら走ってきたのは、俺と同じで孤児の、ラキ。

こいつもナムさんの家で暮らしている。
「何だよ。何か用か？」
こいつは何かある度に、いちいち俺のところに来る。
「ー今っ…魔法屋でセールやってるの！一緒に行こう！」
魔法か。この世界では、魔法は買うもの。
マテリアと呼ばれる魔水晶に、魔力を注いで作る。
魔法にも色々種類がある。炎の魔法や、水の魔法。
魔法の威力は、使用者の潜在能力と、感情で決まる。
「面倒くせぇから。行かねー」
面倒くさいと言えば面倒くさい。
マテリアは大量に持ってるから、あまり必要ない。

「召喚魔獣のマテリアもあるらしいけど？」

ー召喚魔獣？
耳を疑った。そもそも召喚魔獣のマテリアは、店で売られているような代物じゃない。
召喚魔獣は、強力な魔力の塊が、獣や竜の姿になったもので、普通ならマテリアに触れる事すらできない。

でも、もしラキの言っていることが事実なら、手に入れたい物だ。

「ーよし。やっぱ行く。」
「ホントに！？ありがとぉ！」

俺とラキは足早に、街の魔法屋に向かった。

「あ、ここだよー。」

「嘘だろ…？」

そこにあったのは間違いなく、召喚魔獣、イフリートのマテリアだった。

炎獣イフリート

―白羊宮の門、炎獣イフリート。

黄道十二宮と呼ばれる、強力な魔獣の一体。
鬼のような顔、頭には羊の角。上半身は人間の姿だが、下半身は馬のような足に、蹄がある。二足歩行で、素早い。

「な…なんで、イフリートが…？」
しかも、値段は３００ギル。
格安過ぎる。…偽物かもしれない。

俺はマテリアに触ろうとした。
―その時。
マテリアが赤く光り、熱を帯び始めた。
まるで心臓みたいに、脈をうっている。
マテリアの中で魔力が激しく流れている。

俺が手を遠ざけると、光りは薄れて、また元の、冷たく無機質な水晶になった。
「わー…すごかったねぇ」
隣にいたラキが声を上げる。
俺は何も言えなかった。
マテリアの中に居る、イフリートに呼ばれた気がした。

「すいませーん。これ、買います。」

俺がマテリアを掴むと、また、ドクドクと魔力が鼓動しているように見えた。

ナリアデル地下水路

「ーラキ、お前、ナムさんの手伝いがあるんじゃないの？」
そういえば、さっきナムさんはラキを探していた。

「あっ…いけない。そういえばそうだった！じゃあね、ノックス！」
そう言って、ラキは人混みの中に消えて行った。

ーそれにしても、なんでこんな物が、あんな小さな店にあったんだ？
これだけ貴重なマテリアは、帝国に押収されそうなのだが。

ーその時だった。
「あっれぇ？君可愛いねー。俺らと一緒に楽しいことしない？」
あれは…帝国の兵士！？口説かれているのは、…ラキ！？

人混みの中に、帝国の兵士2人と、ラキ。
このままだと、無理矢理連れて行かれるかも知れない。

「ーラキ！」
人の波を掻い潜りながら進んだ。

ラキの手を取って、兵士から、引き離す。
そのまま、俺達は走った。後ろからは、兵士の怒号が聞こえる。
1人は見覚えがあった。
以前、財布をスった兵士だった。

ー金はあまり入っていなかったが。

このままでは追い付かれる。その時、古びた格子の扉が俺の目に止

まった。

扉を開けると、階段があり、下からは、水面に水滴が落ちる音が響いていた。

「はぁ…はぁ…ここまで来れば、追いかけて来ねぇだろ…」

「うん。ありがと、ノックス。」

ラキのこんな小さい声を聞いたのは、何時ぶりだろうか。小さくて、震えるような声だった。

「ここ…どこだ？さっき勢いよく扉閉めたせいで、中からは開かねぇし…」

「え？ノックス知らないで入ったの？ここは、王国の地下水路！ナリアデル地下水路だよ！」

ーナリアデル地下水路…

聞いたことはあったが、入ったことは無かった。

そもそも、入口の場所が分からない。

入口の扉には魔法が施されており、定期的に場所が変わるらしいのだ。

「なぁ、ちょっと前に…子供がモンスターに襲われたのって、地下水路じゃないっけ。」

「…うん。ここだよ。」

ラキの言葉を聞いて、背中に冷や汗が流れるのが分かった。

それでも進まないといけない。

ここから一刻も早く、脱出しなくては。

俺は、マテリアを握りしめて、階段を下った。

蛙

ーそれにしても、地下と言うだけあって、少し寒い。
「ラキ、お前…大丈夫？疲れてないか？」
幅の広い水路の端にある通路を歩きながら、後ろをついてくるラキに訪ねる。

「え？大丈夫、大丈夫。あれくらい…何ともないよ。」

ーすぐに嘘だと分かった。
振り向かなかったから気付かなかったが、ラキは必死に息を整えようとしていた。

「ラキ、あんま…無理すんなよ。」
それだけ言って、再び通路を進んだ。

しかし、いくら進んでも、一向に出口は見つからない。
同じ景色が、延々と続いていた。

暫くして、遠くに大きな鉄の扉が見えてきた。
近づくと、それには文字が刻み付けられていた。

『第三水門操作区域』

ー水門。もしかしたら、ここに出口があるかもしれない。

「行こう。ラキ。」
「ーうん。」

重く冷たい扉をこじ開けると、そこには古く錆びたよくわからない機械と、半円の空間を囲むように流れる滝。
滝壺は相当深いようで、水が地面に落ちる音は、酷く小さかった。
「えっ…と、出口、出口〜」
ラキはさっきから、懸命に出口を探している。
「あっ！あったよ出口！」
ラキが指さす方向を見ると、そこには確かに上層へ続いているであろう階段があった。
「でかした、ラキ！これで出られるぞ！」
一俺が階段に向かって行こうとした時だった。
後方から、激しく水が打ち付ける音が聞こえた。
驚いて振り返ると、そこには、4、5メートルはあろうかという大きな蛙が、静かに此方を睨んでいた。

獄炎の使徒

「こいつ…ケロゲロスって名前だよな…」

―大蛙ケロゲロス。好物は、人間。

俺はイフリートを持ってる。でも、ラキは？

―ラキが危ない。

「ラキ！先に階段上がってろ！」

―ラキだけでも逃がさなければ。そう思い、怒鳴った。

「う、うんっ！わかった！待ってるから！」

―階段を上る音が聞こえなくなる。無事に逃げたようだ。

俺はケロゲロスに向き直った。

「さぁ、来い…」

自分でも、声が震えているのがわかった。

「グォ…グァォオォおぉォオ！！！」

鳴き声が、辺りの壁に反射して、鼓膜を襲う。

「ーっ…！」

―その時だった。握っていた魔水晶から、紅い炎が噴き出した。

炎だが、それは熱くはなく、徐々に集まり、イフリートになった。

「…我が名はイフリート。貴殿が、我が主か…？」

「あぁ、ノックスだ。お前を召喚した。」
―お前、なんて言ったらまずかったかな。
「…わかった。アレを燃やせば良いのだな？」
イフリートは、ケロゲロスを指差して言った。
「あぁ。あいつを倒したいんだ。」
―ラキが待ってるんだ。絶対に生きて戻る！
「―では、行こうか。我が主よ。」
イフリートと俺は、ケロゲロスに向かって走り出した。

地獄の火炎

「おらぁっ！」
落ちていた鉄の棒で攻撃を試みたが、ケロゲロスにダメージは与えられていないようだ。

「…くそっ、何だこいつ…皮が鋼みてぇに硬い…」

「…汝は下がっていろ。」
イフリートの低い声が響いた。
「了解だ。」

その瞬間。辺りの景色が地獄のようになった。
「…我が主、そして主の仲間を傷つけようとする者よ、その身をもって知れ。」

イフリートの指先に、辺りから吹き出る炎が集まっていく。
そして、全ての炎を右手の人差し指の先に集めた。

『地獄の火炎！！』

その炎は、細い糸のようになり、ケロゲロスの心臓を、射り、焼ききった。
ケロゲロスはそのまま力無く後方に倒れ、深い滝壺へと落ちていった。

「私は役目を果たしたようだな。暫しお別れだ。しかし、汝の危機とあらば、いつでも喚ぶがいい。」
そう言って、イフリートは再び炎になり、魔水晶に吸い込まれてい

った。

一魔水晶は、初めて見た時よりも紅く染まっていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3156w/

Magnificent story

2011年11月1日11時11分発行